

## 丸山美知代教授のこと

中原章雄

丸山美知代教授が本学の英米文学専攻に来られたのは、1980年代の終わり近くだった。今日のように日本の各大学が少子化対策に力を入れるより少し前の時期で、当時の文部省は、むしろ一時的に過剰になっていた受験生群を「臨時定員」として私立大学が受け入れることを奨励していたのであった。

80年代中期に国の文教政策への対応を急転回させていた立命館大学も、この流れに活発に応じた。文学部でも、とりわけ社会的要請が大きいと判断された英米文学専攻では、相当数の学生を受け入れることが期待された。

多数の新たな学生増に対し、教員の増員は若干名にとどまった。丸山さんが新戦力として専攻に加入されたのは、このような状況下であったと記憶する。

ご専門がアメリカ現代小説であり、学生たちのアメリカ文学への関心が、それまでのヘミングウェイやスタインベック、フォークナーから、より新しい文学に移りつつあるだけに、期待は大きかったはずである。

丸山さんが新戦力として専攻に加入された時の状況は、このようなものであった。

当時の立命館は、以前からの男っぽい大学というイメージがまだ残っていたのではなかろうか。英米専攻ではそれ以前から、女子学生の数が圧倒的であったけれども、大学全体としては、立命の伝統に、女子大から移って来られた教員として当惑されたこともあったのではないだろうか。

新入生が教員と一緒にクラスごとに撮影したその頃の写真が、たまたま私の手許にある。中高年の男の教員に挟まれて、窮屈そうに丸山さんが坐っておられる写真である。

しかし、窮屈そうにというのは、こちらの勝手な思いこみで、丸山さんは新しい職場で、おそらく新しい境地をたくましく開拓してゆかれたのであろう。

こんな記憶の断片もある。卒業生の記念パーティで、イギリスの抒情詩人であるクリスティナ・ロセッティの詩を吟唱されたことがある。記憶に間違いがなければ、冬の情景のきびしさを歌った詩であった。何となく、大学の中での丸山教授の心象風景を垣間見た気になったものである。

もっと大きな舞台でのご活躍があった。京都アメリカ研究夏期セミナーのことである。

このセミナーは、当時の長田文学部長（現理事長）が立命での開催に以前から熱心なのであった。以前はセミナーを同志社がもっぱら牛耳っていたそうである。

開会のセレモニーの司会を担当されたのが丸山さんだった。著名な内外の学者も参加され、盛会だった。司会者はいたって沉着冷静で、英語のジョークを連発される余裕があった。そのあと、満を持して、長田教授の開会のスピーチがあった。お得意の英語が奇妙に上ずっていたように聞こえたが、おそらく、余人には分らぬほど、感無量ということであったろう。余計なことようだが、それだけ開会までの丸山教授のご苦労もあったはずである。立命では何もかも初めての試みということだったから。

しかし、大学、専攻への真のご貢献は、何ととっても、日常的な教育・研究において、地道な、しかし積極的な努力をたゆみなく続けられたことであろう。

何でもないことのようにだが、着任されたあと、90年代前半は、英米専攻にとって未曾有の危機的な時期であった。90年度の初めに、かろうじて博士課程後期課程の実現という長年の懸案を解決した直後に、その課程の中軸教員の一人である広岡教授が急逝され、次の年度には二人の教授が定年退職された。さらに次年度には、やはり専攻の中軸教員が、家庭の事情で退職されたのである。しかも残った教員間でも結束は必ずしも十分といえない事情があった。20年前のことになるが、いま思いだしても専攻としてあのような深刻な事態を切り抜けられたのが、むしろ不思議な気がする。それだけ丸山さんの堅実な存在が大きかったといえよう。

しかも、90年代の後半には、専攻主任、さらに続いて教務主事（現在の副学部長）を務めておられる。女性教員では初めての教務主事であった。

今世紀に入ってから、今日までのお仕事、ご経歴については、しかるべき方に補っていただかねばならない。

昔なら、定年退職した教員は、庭いじりにでも精を出せばよかったであろう。しかし今は、そんな時代ではない。しかもご専門のナボコフなど、現代アメリカ小説の分野は、円熟した研究者としての丸山教授に、さらに期待するところが大きいはずである。

これまでのご苦勞に深く感謝し、さらなるご活躍をお祈りしたい。

(本学名誉教授)